

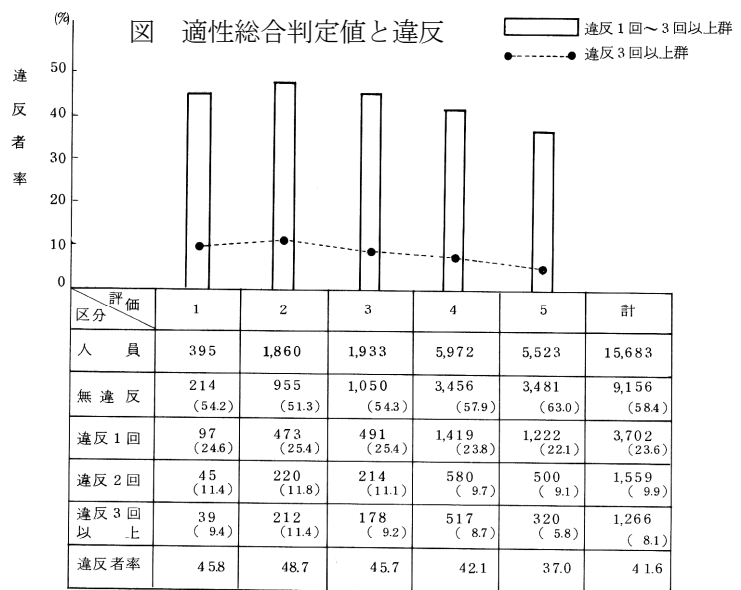
## 初心運転者の実態に関する調査研究（昭和 53 年度）

様々な初心運転者対策が講じられているが、今後さらに事故防止対策を充実するためには、初心運転者による事故や違反の実態を的確に把握する必要がある。そこで、指定自動車教習所における教育の現状に触れるとともに、初心運転者の交通違反・事故の実態と、免許取得時の教習成績の評価や運転適性等との相関を解析した。

① 昭和 51 年 7 月からの 1 年間に指定教習所を卒業して普通免許を取得した 3 万人（うち 70% が 18～24 歳で、男性が 56.8%、女性が 43.2%）をサンプルとした。運転適性検査の結果をみると総合判定（T）の判定値の高い（4～5）者が多く（男性 73%、女性 77%）、判定値の低い（1～2）者は男性 14%、女性 11%である。年齢の高い者ほど卒業までの全技能教習時限数が多く、男性の 25～29 歳で 51%が 34 時限以内であるのに対して、50 歳代では 48%が 55 時限以上である。女性は男性より時限数が多く、年齢差による変化は男性とほぼ同様である。修了検定の受験回数は、男性の 18～39 歳では 60%が、50 歳代では 47%が 1 回で合格している。女性は 20 歳未満では 53%が、50 歳代では 35%が 1 回で合格している。卒業検定は、男性は 50 歳代でも 68%が、女性は 50 歳代でも 58%が 1 回で合格し、修了検定より合格率が高い。減点項目は、アクセル、クラッチ関係が全体の 40%を占め、次いで安全確認、合図、ブレーキ、交差点の通行方法、ハンドルの順である。

② 免許取得後 1 年間の交通違反は、違反者率（全運転者の中で 1 件以上の違反をした者の割合）では 28.5%である。違反率は 48%と全年齢層平均の約 1.4 倍であり、男性は 72%、女性は 16%

である。人身事故率は 2.1%で、全年齢層平均の約 1.8 倍であり、男性は女性の約 4 倍である。死亡事故 11 件のうち、20 歳未満の男性によるものが 7 件も占めている。適性検査結果と違反、事故との関係については、総合判定値（T）の低い者が高い者より約 10 ポイント違反者率が高く、3 回以上の反復違反者率は、判定値の低い者が高い者の約 2 倍である（図）。状況判断力の評価値の低い者の事故原因となった違反は、歩行者保護義務違反、追越し違反等である。



③ 性格特性と違反者率との関係を違反 3 回以上の群で見ると、攻撃性はやや反比例、協調性は反比例し、評価の低い者は高い者の 2 倍となっている。5 つの類型（A～E で A より E の方が優れている）に分けた人間像と違反との関係を見ると、違反は A 型が最も多く、E 型は A 型よりも違反率が 15%低い。また A 型、B 型で事故者率が高い。若年者の教習時限が短いためか 29 時限以下で卒業した者の違反者率が高く、また、男性の 50 歳代の 25～29 時限のグループに事故者率が高い。進度類型と事故の関係は、男性では順調型に事故者率が高く、不振型に少ないが、女性ではそのような傾向はみられない。